

Ⅱ. ハノイ大学への教員派遣事業

1、派遣教員、奈良女子大学研修生

派遣教員	鈴木康史	奈良女子大学文学部 准教授
派遣学生	岡崎沙織	大学院人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻 1 回生

2、派遣期間

平成 22 年 10 月 17 日(日)～24 日(日)

10 月 17 日(日) 出発 (関空～ハノイ)

10 月 18 日(月) 講義

10 月 19 日(火) 講義

10 月 20 日(水) ハノイ市内視察

10 月 21 日(木) 講義

10 月 22 日(金) 講義

10 月 23 日(土) 帰国 (ハノイ発)

10 月 24 日(日) 関空着

3、事業概要

3-1 講義日程 講義テーマ「現代日本の社会と文化」

3 年生の二つのクラスで、同じテーマの授業を二回行ったが、状況に応じて、少し内容は変更した

3 年生 1NB、2NB クラス

10 月 18 日 7:30～11:00

講義のイントロダクション (アンケート)

日本マンガを考える基本概念の紹介

10 月 19 日 7:30～11:00

日本のマンガ史概説 (作家論を中心に)

10 月 19 日 9:30～11:00

学生交流プログラム 日本文化と「桜」

3 年生 3NB、4NB クラス

10 月 20 日 7:30～11:00

講義のイントロダクション (アンケート)

日本マンガを考える基本概念の紹介と、マンガ各論

10月21日 7:30~11:00

日本のアイドルの歴史とサブカルチャーについて

10月19日 9:30~11:00

学生交流プログラム 日本文化と「桜」

3-2 講義概要

(文責：鈴木康史 准教授)

3-2-1 10月18日~19日の授業(1NB、2NBクラス)の概要

【1時間目】18日前半

まず、講義のイントロダクションとして、学生たちの日本語力と基礎的な知識を知るために、学生たちに、①なぜ日本について勉強しようと思ったのか、②知っている日本のマンガ、アニメ、③知っている日本の歌手、アイドルなど、について書いてもらった。

そのアンケートをその場で読み、彼らの日本マンガや現代のカルチャーに関する知識については、必ずしもこちらの期待したものではなかったことがわかったので、急遽方針の変更を迫られた。

もともと本講義は、マンガ分析のための理論と、それによる実作品の分析を通史的に行うこと、という二本立ての予定であった。しかし、アンケートを見て、そういう方法論的な議論以前に、そもそも、作品自体を見たことも聞いたこともない学生たちが多そうということから、具体的なものを見せ、紹介するということに主眼を置くべきだと判断した。本来であれば大幅に全体を構成し直さねばならないのであるが、それは時間的に厳しく、このクラスは、どうしても理論的な議論が多くなってしまったことは否めない。(大幅な変更は、後半の3、4NBクラスの授業でおこなった。)

以下、授業の具体的な内容について触れておくと、この時間の残りでは、マンガを分析する最も基礎的な概念である大塚英志の「傷つく身体」という概念について解説した。ディズニーアニメの映像などを見せながら、「傷つく身体」概念をマンガの中心テーマに据えたときれる手塚治虫と比較して、手塚が成し遂げた大きな転回を理解してもらうことを目標としたが、難しい概念にもかかわらず、映像や絵を多く見せて具体的に説明することで、理解度はあがったように思う。

【2時間目】18日後半

この日の1時間目の授業で、「傷つく身体」という概念の理解が図られたようであったので、この時間以降は、それが後の作家たちにおいていかに問題化され、変奏されているのかに焦点を当てながら、各作家論を展開することとなった。2日間で具体的に取り上げた作家は、手塚治虫、藤子不二雄、梶原一騎とスポ根マンガ群、萩尾望都・竹宮恵子ら24年組、井上雄彦らである。いずれも日本マンガ史においては欠かせない作家たちであるが、日本語学科の学生たちであっても、全員を知っている学生はほとんどいなかったゆえに、大塚

の分析概念によって各作家を解釈するという作業の前に、まずは各作家の主要作品の紹介を行うことにした。

この2時間目は、手塚、藤子不二雄、梶原とスポ根マンガを取り扱った。重要な作品は、必要なページを日本でスキャンしてパソコンに取り込んでいたので、それらをゆっくりと、学生たちが日本語を読めるペースで映し出すことに時間を充分に取るようにした。特に、ベトナムでは知名度が抜群であるとわかった藤子不二雄については、時間を取るべきであろうと判断し、短編作品などのストーリー全部をスキャンしたものを用意していたので、それらをゆっくりと映し出して、せりふなどの日本語そのものの解説も交えながら講義を行った。『ドラえもん』という、一見円環する時間の中で成長しない主人公たちが繰り返すコメディタッチのマンガの中にも、傷つきながら成長するのび太、という「生身の、成長し、傷つく」「身体」のエピソードが登場していることなどを解説し、藤子不二雄が手塚の系譜上にあることなどを解説したが、『ドラえもん』という知名度の高い作品のおかげで、学生たちは興味を持って聞いてくれていたように思う。(課題も藤子不二雄の短編マンガを選定した。)

【3時間目】19日前半

この時間は、前日の続きの講義として、日本の少年マンガの主流をなすスポ根マンガ、24年組に始まる少女マンガの系譜、そして、現代最も影響力のある井上雄彦の作品を取り上げた。梶原一騎や萩尾望都などはほとんど誰も知らなかったがゆえに、駆け足になってしまったが、井上雄彦の『スラムダンク』は、アニメで知っている学生もそれなりにいたので、授業では、『スラムダンク』以降の井上のマンガ『バカボン』『リアル』を紹介することの時間をかけた。たとえば、『バカボン』でリアルに描かれる真剣の勝負は、手塚の「傷つく身体」の系譜上にあること、人は切られたら血が出るということをごここまで徹底的に主題化した作品はないこと、などを語り、手塚の主題がマンガを子供のものから離脱させた、その50年後の到達点としてこの作品を紹介した。また、『リアル』は、障がいという「傷つく身体」が主題化されていると同時に、さらにそこにかかわる現代の若者の生身の姿を切り取ったマンガであることを紹介し、井上雄彦が日本マンガの一つの到達点であるということ結論として、講義の締めくくりとした。

(なお、この時間は、朝学生たちがまだ全員集まらない時間を使って、奈良女子大学の学生生活の映像を流したが、それが学生たちと、先生方に最も評判が良かったことも付記しておきたい。)

なお、授業全体の工夫としては、日本から、最新の『少年ジャンプ』や、多数の漫画の単行本を持って行き、スキャンだけでなく、現物を見せながらの授業も心がけた。本を持って行くのは重労働ではあるが、日本語のマンガを見る機会はそれほどないようであり、休み時間などは、競うように回覧してくれており、かなり興味を持ってくれたようである。

3-2-2 10月21日～22日の授業(3NB、4NBクラス)の概要

【1時間目・2時間目】21日

このクラスも1,2NBクラスと同様に、講義のイントロダクションとして、アンケートを実施した。しかし、すでに1,2NBクラスの講義終了後、講義内容を相当にアレンジしていたので、こちらのクラスについては、そのアンケートをその場で授業に反映させる必要はなく、スムーズに講義が行えたと思う。

1,2NBクラスからの変更点は、マンガを初日だけにして、二日目はアイドルについて見ってもらうことにしたこと、初日のマンガについても、「傷つく身体」についての議論を減らし、とにかく、作品を見てもらって、面白さを伝えることにシフトしたこと、の二点である。

が、マンガ論の主要な部分を全くしゃべらないままであってもいけないだろうという判断もあり、1時間目には、大塚英志の「傷つく身体」という概念についての解説と、手塚、藤子不二雄の解説は行った。

しかし、あまりそうした概念にはこだわらずに、以下、梶原とスポ根、そして井上雄彦へと作家紹介を進めていったのが、1時間目の後半と2時間目である。井上雄彦の諸作、特に『リアル』については既にかいた理由から、最もベトナムの若い人達に読んでもらいたい作品として、時間をかけて紹介した（寄贈図書にもマンガとして唯一入れておいた）

【3時間目】22日前半

この時間は、少し趣向を変えて、戦後すぐから現代までの日本のアイドルについて、日本で収集した動画などを見せながら紹介した。学生たちはこの分野についてはマンガよりも知識が多かったようで、知っているアイドルが登場するとキャーキャー騒ぐところは日本の学生と何ら変わらないのであるが、必ずしも彼ら/彼女らは系統的にアイドルを知っているわけではなく、それらはつまみ食いにとどまっていることも、また、アンケートから確認されていた。

それゆえに、この授業では、男性アイドル、女性アイドルに分け、年代順に代表曲を流しながら歴史を追って系統的に整理し、社会背景などと関連させながらの解説を要所に挟んでゆく形での授業を行った。時代順に並べてみると、やはりそれぞれの時代の特徴があり、学生たちにはそれらはうまく伝わったようである。

もちろん、少しは理論的なことも語らねばということで、80年代がアイドルの曲がり角であって、それはオタクの誕生と精神的に表裏一体のものではないか、日本のサブカルチャーが一斉に内向き、自己言及的になっていったのが80年代で、それがマンガの世界では大成功したが、アイドルの世界ではむしろ世界基準に後れを取る結果につながったのではないのか…などということを講義した。

（なお、この時間も、朝学生たちがまだ全員集まらない時間を使って、奈良女子大学の

学生生活の映像を流したが、1,2NB クラス同様に評判が良かった。)

3-3 学生プログラム

(文責：鈴木康史 准教授)

19日と22日の9:30から11:00は、研修学生によるプログラムを行った。日本文化と「桜」というテーマで、日本人が桜に対してどのようなイメージを投影しているのかについて、映画やマンガ、写真などを題材に紹介するものであった。こちらもビジュアルが充実した講義であり、学生たちは興味深げに聞き入っていた。また、鈴木氏の講義で紹介したマンガや俳優さんが取り上げられることもあり、違った側面からの光を当てることで、学生たちの理解も深まったと考えられる。